A-6

分裂文から見る日韓のコピュラの特徴

金智賢（宮崎大学）

１．問題提起

本発表では、日本語と韓国語のコピュラとされる「だ」と「ita」の働きと意味の違いを明らかにする一つの手がかりとして、いわゆる分裂文（及びその亜流）を取り上げる。英語圏から始まった分裂文の研究は、日本語や韓国語では「～のは～だ」・「～kes-un ～ita」という構文を中心とした研究へと発展してきているが、日本語でも韓国語でも、英語との統語的な違いへの解明に重点が置かれた議論が多く、相対的に日韓の分裂文は非常に類似しているように見える。ところが、両言語の分裂文構造には看過できないズレがある。本発表では、そのズレを記述的に分析し、それが普通のコピュラ文に見られる日韓の違いと本質的に変わらないことを主張する。

２．分裂文について

分裂文とは、形式的には、主語が節で構成され、述語がその節から取り出された特定の成分によって構成されるコピュラ文（砂川 2007）で、同じ意味の単純文を有するとされる。英語では（１）のような単純文（simple sentences）に対して、研究者によって様々な分裂文類が想定されるが、主に（２a）のような分裂文（clefts）、（２b）のような疑似分裂文（pseudo-clefts）、（２c）のような倒置疑似分裂文（reversed pseudo-clefts）が取り上げられる（例文は Collins 1991:1-2 より）。

（１）Tom offered Sue a sherry.
（２）a. It was a sherry that Tom offered Sue.
　　b. What Tom offered Sue was a sherry.
　　c. A sherry was what Tom offered Sue.

日本語や韓国語は「it」のような形式を有しないことから、厳密に言って、英語のような分裂文を持たず、（倒置）疑似分裂文に近い構造のみを有すると言える（以下、出典のない例文は日韓コーパス、KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」・少納言、及び、「SJ-RIKS Corpus」より）。

（３）a. あの男を殺したのは私です。
　　b. ku namca-lul cwukin kes-un ce-pnita.（韓国語訳）
　　（あの 男-ヲ 殺した ノ-ハ 私-デス）

これらに対応する倒置疑似分裂文は、形式的にいわゆる「のだ」文・「kes-ita」文にもつながることから、日韓両語においても、分裂文は重要な構文であると言える（「のだ」・「kes-ita」文そのものについては本発表では取り上げない）。

（４）a. 私があの男を殺したのです。
　　b. ce-ka ku namca-lul cwukin kes-ipnita.（韓国語訳）
　　（私-ガ あの 男-ヲ 殺した ノ-デス）

なお、英語では以下のような「th-clefts」をどこまで認めるかということが問題になったりするが（「the

man」などをも認める立場（Halliday 1967 等）と「the one」などしか認めない立場（Collins 1991 等）がある)、日本語と韓国語でも「の」「kes」に代わって一般名詞が用いられる構造が考えられる。

（５）a. The one/man who offered was Sue a sherry was Tom.
b. Tom was the one/man who offered Sue a sherry. （Collins 1991）
（６）a. あの男を殺した人は私です。(←（３a))
b. ku namca-lul cwukin salam-un ce-pnita.（韓国語訳）
（あの 男-ヲ 殺した 人-ハ 私-デス）

これについては、日本語と韓国語で相違が見られる部分でもあり、後述する。本発表では、一先ず、形式名詞「の」・「kes」とコピュラからなる（３）のような文構造を日本語と韓国語の分裂文と認め、この構造をめぐって日韓の共通点と相違点がどのように整理できるか考えていきたい。

３．日本語と韓国語の分裂文

３．１　焦点の位置に来る要素の違い

分裂文の「～のは」・「～kes-un」に入る節の部分は「前提（presupposition, relative clause)」、コピュラの前「～だ」・「～ita」に入る要素は「焦点（focus, highlighted element)」と呼ばれる。焦点になるのは単純文の主語、目的語、補語等の文成分と節があるが、日韓の分裂文でまず目立つ違いは、焦点にくる要素の形態が、日本語の方が豊かということである。Matsuda(2000)の指摘通り、日本語の分裂文は焦点にくる要素が英語（疑似分裂文）と比べて多様であるが、韓国語は焦点にくる要素に制約が多く、むしろ英語の疑似分裂文に近いと言える。

（７）a. *Where John went is to New York.
b. ジョーンが行ったのはニューヨークにだ。 （Matstuda 2000）
c. ??con-i kan kes-un nyuyok-ey-ta.（韓国語訳）
（ジョーン-ガ 行った ノ-ハ ニューヨーク-ニ-ダ）
（８）a. ?con-i kan kes-un nyuyok-ita.
（ジョーン-ガ 行った ノ-ハ ニューヨーク-ダ）
b. con-i kan kos-un nyuyok-ita.
（ジョーン-ガ 行った ところ-ハ ニューヨーク-ダ）

日本語の「に」(着点) 格に対応する韓国語の「ey」格名詞句は、分裂文の焦点に置かれると不自然で、（８a）で見るように、助詞「ey」がなくてもやや座りが悪い。この文の意味を表す最も自然な韓国語文は、（８b）のように、主語名詞を「場所」を表す形式名詞にしたものである。（８b）は、分裂文の（７c）に比べ、一般的な二項名詞文（「A は B だ」）に近いものになっていると言える。

着点を表す「に」格の他にも、日本語は分裂文の焦点位置に「を」格、「に」(対象) 格、「へ」格、「で」格など、様々な格助詞がつく名詞句が用いられ得る。

（９）a. 父が愛したのは芸術をだった。 （砂川 2007）
b. 驚いたのは、その値段の安さにです。 （野田 1996）
c. いちばん腹が立つのは、自分自身にだ。

d. チャーター便の形ではじめて海外進出を果したのは一九七一年、香港へだった。
e. 太郎が花子に出会ったのはここでだ。（森川 2009）

これらを韓国語に表すと、（9a）と（9b）は非文になり、（9c）～（9e）は話者によっては容認される可能性がある。ところが、韓国語の大規模コーパスを分析した Nam(2006)によると、実際使われている分裂文の焦点名詞句につく助詞は、格助詞の「eyse」((場所) デ)、「pwuthe」((起点) カラ)、「kkaci」（マデ）と、補助詞（取り立て）の「ppwun」（ダケ）のみであるという。同調査では、韓国語は分裂文自体が少なく、分裂文の焦点位置にある名詞句に助詞がついたものはさらに少数であるということも報告されている。(場所格が焦点にある（9e）については後述する。)

さて、英語の分裂文類をコーパスより調べている Collins(1991)によれば、英語は（7a）のような疑似分裂文の焦点には前置詞句が現れにくい反面、（2a）のような分裂文の焦点には幅広い前置詞句が用いられるという。焦点位置に来る表現の制約という観点からすると、韓国語は英語の疑似分裂文、日本語は英語の分裂文に近いと言えよう。

3．2　「の」と「kes」の違い

分裂文の前提を構成する「の」と「kes」の意味にも違いがある。日本語の「の」は分裂文全般で補文標識（complementizer）として働くものと見られるが、韓国語の「kes」は、補文標識になっているとは言えない場合がある。その一つは、前提が現場指示的表現を含むと分裂文が言えなくなる現象である。以下の二例は類似しているが、(10) では、日韓共に分裂文が成立するが、(11) では、韓国語の分裂文は不自然である。(10) と異なる (11) の特徴は、焦点の「田中先生」と対応する形で、前提の中に「あそこにいる」といった現場指示的表現があることである。その指示対象が尊敬の対象であることから「いらっしゃる」と尊敬語も用いられている。韓国語は、このような場合「kes」ではなく人を高める形式名詞の「pwun」（方）を使わないと、例えば、他人に情報を伝える文としては不適切である。

(10) a. あの男を殺したのは私です。(＝3a)
b. ku namca-lul cwukin kes-un ce-pnita. (＝3b)
（あの 男-ヲ 殺した ノ-ハ 私-デス）
(11) a. あそこに座っていらっしゃるのは田中先生だ。（Matstuda 2000:19）
b. ??ceki anca kyeysin kes-un tanakha sensayngnim-ita.　cf. ~ anca kyeysin pwun-un ~
（あそこ 座って いらっしゃる ノ-ハ 田中 先生-ダ）　（~ 座って いらっしゃる 方-ハ ~）

このことは、分裂文に用いられている形式名詞「kes」が「もの・こと」を表す語彙的意味を維持している、単なる補文標識ではないことを示唆する。(10b) が自然なのは、既存の事態や行為・感情などの主体を特定するだけの文であるためで、(11) のように眼前の事態に言及する場合は、特定対象の性質（ここでは「人間」という）が浮き彫りになり「kes」が使えなくなるのである。現場指示表現や尊敬表現がなくても、焦点が人を表す場合、韓国語は「kes」より「salam」（人）などが使われる傾向がある。

(12) a. 「次ぎ行ってみよう～～～」って叫んでいるのは誰だ？？？
b. wuli-ka camtulessul ttay kkaye issten salam-un nwukwu-ci?
（私達-ガ 眠っていた とき 起きていた 人-ハ 誰-ダ）
(13) a. 責任を問われるのは先生だけじゃないと思いますよ。親も、責任を問われているんです。

b. elinitul-kwa kacang kakkai issnun salam-un sensayngnim-ita.
（子どもたち-ト 最も 近くに いる 人-ハ 先生-ダ）

以上の議論は前節の観察と相通ずる。例えば、焦点が場所を表す場合、韓国語は「kes」の代わりに「kos」（ところ）が用いられやすい。発表者は、韓国語で（9 e）のような文がどれだけ使用されているか確認するため、「ここでだ」と「ここだ」という述語を持ち、かつ、主語を有する文を日韓コーパスから調べたが、「ここでだ」の例は韓国語で 1 件あるのみだった。ところが、「ここだ」を述語に持つ文（韓国語例 22 件、日本語例 27 件検出）を観察したところ、その主語は、韓国語の場合 8 割以上が、大半を占める「kos」をはじめ「tey」（ところ）、「wichi」（位置）、「cicem」（地点）、「cali」（空間）など場所を表す名詞で、「kes」は 9.1%（2 件：どちらも「ここ」は文脈指示）だけだったのに対し、日本語の場合、場所を表す主語名詞は半分未満で、22.2%（6 件：すべて「ここ」は現場指示）が「の」だった。シンプルな調査ではあるが、日本語の方が分裂文をより使用していることが分かる（「のは」より「のも」が多かったことを断っておく。興味深いのは、「写真はここだ」のようなウナギ文が 14.8%あった）。

前節で観察した、格助詞を伴った名詞句が焦点に来にくい現象も、「kes」が「もの・こと」を表すという本来の語彙的意味を残していることを示すものと考えられる。分裂文が前項と後項の同一化（identification）を基本とするものなら（Collins 1991）、文成分としての格表現と「kes」が表す実体とはそのままでは結びつきにくいわけである。

3．3 「だ」と「ita」の違い

分裂文の重要な部分の一つはコピュラであるが、「だ」と「ita」そのものも統語的・意味的に異なる特徴を持つと考えられる。ここでは、分裂文と類似した構造を有すると思われる文で、日本語は生産的であるが、韓国語は「ita」を用いて表現することができない次のような文を観察する。以下の例における「だ」は、従属節全体を受けているように見えるが、韓国語ではそのまま「ita」にすることができず、「kulehta」（そうだ）、「malita」（（という）話だ）などの表現にするか、ゼロにするしかない。

（14）猟区をおかした者になにがあろうと、つぐないは不要。かりに、いのちを落としてもだ。
（15）ポラロイドカメラが出ればそれを買う。米買う金もないのにだよ。
（16）これ以上、痛い目に遭わせねえから。ただし、ミリーを大切にすればだ。
（17）「ねえ、どうしてドニ鈴木のオフィスに行こうなんて思ったの？」「表参道に来たからだよ。」

これらの例における「だ」文が可能なのは、先行文脈の内容そのものが前提と理解され、分裂文の「～のは」の部分と類似した働きをしているためと考えられる。ところが、その部分を「～のは」と言語化しても依然と自然である保証はない。これは、分裂文とは異なる点である。韓国語は、このように、前提が「~kes-un」と言語化されにくい場合は「ita」文にすることができないと考えられる。(14) ～ (17) と類似した使い方で「ita」に先行できる従属節では「ese」（て）節と「myense」（ながら、て）節があるが、これらの節は分裂文の焦点にもなれる（Nam(2006)の調査では、コーパスからは「ese」節のみ検出されたとしている）。

（18）a. umtay kyoswutul-i pwuceng-ul ceciluko issta. iphak-kwa kwanlyenhayse-ta.
（音大の 教授たち-ガ 不正-ヲ 犯して いる. 入学-ト 関連して-ダ）
b. apeci-ka ku-lul yenkica-lo incenghan ke-n choykun tulese-ta.

（父-ガ 彼-ヲ 演技者-ト 認めた ノ-ハ 最近に 入って-ダ）

（19）a. mincwutang-i honlan-ey ppacyetulko issta. cipangsenke champhay-ey tayhan chaykimlon-i pwulkecimyense-ta.

（民主党-ガ 混乱-ニ 陥って いる. 地方選挙 惨敗-ニ 対する 責任論-ガ 出てから-ダ）

b. ku-uy ilum-i allyecin kes-un 1980nyentay cho <payccang-ulo sapsita>-lul naymyense-ta.

（彼-ノ 名前-ガ 知られた ノ-ハ 1980 年代 初 <度胸に生きよう>-ヲ 出してから-ダ）

以上の議論が示唆するのは、「～ita」は基本的に言語化されたものと等価の「述べられる対象」を表す部分を要求するのに対し、「～だ」は必ずしもそうではないということである。分裂文は「～のは」・「～kes-un」という部分を有する構造であるが、それぞれ「だ」や「ita」との結びつきの性質や強度という点では異なる可能性があるのである。

4．分裂文の意義

これまで「～のは～だ」・「～kes-un ～ita」の構文を中心に見てきたが、助詞の「は」・「un」がそれぞれ「が」・「i」をとることがある。日本語ではハ分裂文とガ分裂文と呼ばれ、その違いについても論じられているが、韓国語と比較したときにまず言えるのは、日本語はハ分裂文の使用頻度が高いということであろう。韓国語に「～kes-un ～ita」型の分裂文は少ないと既に述べたが、Choi(2016)によれば、韓国語の口語では un 分裂文類より i 分裂文類の頻度が高いという。砂川(2007)によると、ハとガ分裂文は焦点構造がかなり異なるが、韓国語では、焦点構造は un 分裂文と同様なままで、前提を「～i」で表している分裂文がしばしば見られる。

（20）ani, nwukwunwukwu kasssupnikka? kan salamtul.

（だから, 誰誰 行きましたか? 行った 人々）

e, kuttay kan ke-y cehakoyo, paycengswuk ssi, iunhyey ssi, cenokkyeng ssi ilehsupnita.

（えと そのとき 行った ノ-ガ ペ さん イ さん チョン さん こうです）

実は、助詞の使用に関わるこのような傾向は、普通の名詞文「A は B だ」や「A が B だ」における日韓の違いと類似している。韓国語では、分裂文と類似した構造を有するとされる倒置指定文（西山 2003）が、（「幹事は誰か」という質問に答える形で）「幹事は田中だ」ではなく、「幹事ガ田中だ」のような文になることがあるのである。また、「ここはどこですか」「私は医者です」のような措定文において、日本語では前提とされる「ここは」「私は」の部分が、韓国語では「ここガ」「私ガ」のようにもなることは既に知られている（田窪 1990、金智賢 2016）。

一方で、日本語は、韓国語では考えられない前提を「～のは」と提示した後、焦点を述べるといった言い回しが深く根付いているようである。次のようなハ分裂文類は日本語社会の到るところで見られるが、韓国語には到底表現できない。

（21）なりたいのはきゅっと引き締まった女。（広告のフレーズ）

（22）大きいのは言葉の壁なのかなあと思います。（NHK 番組中）

さらに、言語化されにくい前提を受ける（14）～（17）のような「だ」文も、より前提が想定されにくい次のような用法を持つ。言うまでもなく、「ita」にはこのような用法はない。

（23）深呼吸しよう。瞳，できるね？ 深呼吸だよ。
（24）これをそこで焼き捨ててくれ（中略）早くだ！！理由は聞くな！
（25）その船がだ。嵐の中であったという。
（26）名づけただけでは，もちろん解決しないから，なんとかしなくちゃだわ。

表面的には助詞やコピュラの使い方のズレとして表れるこのような違いは、3 節で論じた日韓分裂文の違いと本質的に連動している。その本質は次のようにまとめられる。(i) 韓国語の「ita」は二つの概念を強く結びつける働きが優先される。助詞「i」はそれを明示的に示すものである。(ii)「は」と「un」はどちらも前提を表すが、韓国語では前提にならないようなものが日本語では前提となりやすい（このことは田窪 1990 の議論と相通ずる）。日本語の「だ」はその前提を受ける形で用いられる。

5．結論

これまでの議論は、韓国語のコピュラが基本的に「A ガ B デアル（こと）」を表すレベルに、日本語のコピュラは「A は B だ（よ）」のようなレベルにそれぞれ適合していることを物語る。「ita」が強く結ぶ二つの概念うち先行する一つは主語と呼ばれるもので、「だ」が受ける前提とは主題に他ならない。

韓国語は、日本語と同様に主題型言語とされるが、少なくとも分裂文を含むコピュラ文では、「主語―述語」構造が出来上がった上で「主題―解説」構造が被さる形で運用されると考えられる。他方、日本語は「主題―解説」構造が優先され、「主語―述語」構造はその付属物として自然に生まれるものと考えられる。今回、そのようなコピュラ文の特徴を、分裂文を通して窺うことができたと考える。

謝辞
本発表は、JSPS 科研費 17K02734 の助成を受けたものです。

参考文献

金智賢(2016)『日韓対照研究によるハとガと無助詞』ひつじ書房
砂川有里子(2007)「分裂文と文法と機能」『日本語文法』7-2、日本語文法学会、20-36
田窪行則(1990)「対話における知識管理について―対話モデルからみた日本語の特性―」『アジアの諸言語と一般言語学』三省堂、837-845
西山佑司(2003)『日本語名詞句の意味論と語用論－指示的名詞句と非指示的名詞句－』ひつじ書房
野田尚史(1996)『新日本語文法叢書 1　「は」と「が」』くろしお出版
森川正博(2009)『疑問文と「ダ」―統語・音・意味と談話の関係を見据えて』ひつじ書房
Choi, Yoon-Ji (2016) A Syntactic Construction Emergent in Spoken Language: Quasi-clefts, 『國語學』79, 國語學會, 187-237
Collins, P. C. (1991) *Cleft and pseudo-cleft constructions in English*. Routledge Library Editions: The English Language. (2015)
Halliday, M. A. K. (1967) Notes on transitivity and theme in English, Part 2. *Journal of Linguistics* 3, 199-244
Matsuda, Yuki (2000) An Asymmetry in Copular Sentences: Evidence from Japanese Complex Nominals Headed by *–no*. *Gengo Kenkyu* 117, The Linguistic Society of Japan, 3-36
Nam, Kil-im (2006) A corpus-based study of Korean cleft sentences, 『형태론』8-2, 339-360